

インド・ブータン農産物物流視察 ⑤ コールドチェーンの地図をゼロから描く

農薬不使用野菜に 輸出のポテンシャル

インドと中国という巨大な国に挟まれた小国ブータン。国連基準では後発開発途上国(最貧国)に分類されるが、国民の9割以上が幸せと感じている「幸せの国」としても知られる。農業は就業人口の約6割が従事する基幹産業だが、国土の大部分が山岳地帯であるため耕作地は約3%程度。1戸あたりの農地が狭く、農業の生産性も低い。

一方、大乘仏教の不殺生の教えと環境保護重視の観点から推進する無農薬農業は農業大国との差別化になっている。「量」より「質」を重視した農産物の輸出拡大は、対インドをはじめとする慢性的な貿易赤字縮小に寄与するが、輸出の後押しにはコールドチェーンの整備が不可欠だ。

2016年に国交樹立から30周年を迎えた日本とブータン。農業協力はそれ以前からで、1960年代に、海外技術協力事業団(現在のJICA)国際協

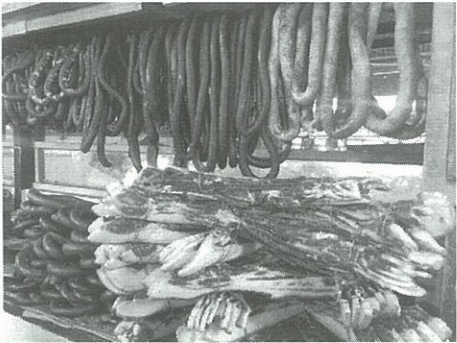


山岳地帯で耕作地が限られる

力機構)を通じ、農業専門家の西岡京治氏がブータンに派遣され、同国の農業の発展に大きく貢献した。以降、JICAによる支援も、農業の機械化や換金作物の開発・普及、農村部の起業家育成など農業分野が中心となっている。

西岡氏の農業指導により、ブータンでは多様な野菜がつけられるようになり、いわば農業改革がブータンの食文化を変えた。しかし、日本と比べると食事のバラエティは乏しい。殺生を禁じているため魚や肉は基本的にインドから輸入し、山岳地帯の気候や冷蔵庫がない頃からの慣習によって、干した肉や魚を水で戻して食べる。

ブータンには冷蔵倉庫が少ないため、チルド肉は輸入されない。だから、何でも干して食べる慣習は今も続いている。敬虔な仏教徒で「足るを知る」生き方が根付いているせいも、「もつ」といういろいろな美味しいものを食べたい」といった食への関心が薄いのか。清貧と互助の思想



市場で売られる干した肉

により、頭ひとつ抜けて儲けたという発想もあまりないという。農業の生産性向上が進まないのも、これまでコールドチェーンが未発達なのもそういった国民性を反映しているのか。

変わるブータン、 若者の起業が増加

しかし、ブータンは変わろうとしている。近年、若者を中心に農村部から都市部への人口のシフトが進んでおり、農村部では若い働き手が減少。現地の有力企業グループのひとつシンゲ・グループのUgen Tsechup会長は「若い世代が農家を継ぐうとしないケースがある。大学を卒業しても雇用が限られているため、起業する若者が増えている」と話す。こうしたスタートアップに同グループも出資しており、「若者が我々を巻き込んでいく。これが将来のブータンの姿だ」。

YIGAチョコレートは2017年に設立されたスタートアップで、ブータン初のチョコレートメーカー。国内13カ所で販売し、海外への販売も視野に入れている。ブータン南部で生産されたカカオの原料への使用も検討中だ。「物流のことは考えていなかった。どうしていくか考えたい」(同社オーナーのKinley Pelden氏)。コールドチェーンのニーズが生まれつつある。